

# 近代の光と影（前半）

浅野慎一『人間的自然と社会環境：人間発達の学をめざして』大学教育出版、2005年

## 第I部 人間環境と自然・社会

### 第4章 近代の光と影(前半)

#### 《克服すべき「常識」》

近代は、物質主義、産業・経済優先、科学万能、西欧文明至上主義、人間中心主義、一元的な同化の強制、「人間による自然の征服」の時代であり、これが今日の危機的な環境破壊の元凶だ。だから精神・生活・自然を重視し、東洋思想、生命圏平等主義、多元主義等の見方が、現在の危機を克服するオルタナティブになる。

#### 【1. 近代科学批判とその陥穽】

近代文明・近代科学＝環境破壊の元凶？

ex) 物質主義、産業・経済優先、人間中心主義、一神教・神人同型論、

→オルタナティブ：非合理性、オカルト、多元主義、生命中心主義、全体論、直観、東洋文明・多神教、精神世界、

＝近代文明・近代科学に対する無知。

ex) 進化論・地動説＝神人同型論、静態的秩序、中世的・神権的コスモロジーの下での「人間中心主義（地球中心主義）」を根底から否定。

万有引力＝太陽系天体の運行と地上の力学を統一。「地球中心主義・人間中心主義」の終焉。

ルネサンス・宗教改革＝自然から贈与された生命としての人間。human nature。

近代的人権思想＝「自然権・自然法」思想。

近代自然主義・ロマン主義＝自然を賛美。自然を征服してうぬぼれる人間の愚かさを批判。

近代の「人間中心主義・ヒューマニズム」＝人間と自然の対立を前提としない。自然の一部としての人間。

ルソー<sup>1)</sup>「万物をつくる者の手をはなれるときすべてはよいものであるが、人間の手につるとすべてが悪くなる。人間はある土地にほかの土地の産物をつくらせたり、ある木にほかの木の果をならせたりする。風土、環境、季節をごちゃまぜにする。犬、馬、奴隷をかたわにする。すべてのものをひっくりかえし、すべてのものの形を変える。人間はみにくいもの、怪物を好む。なにひとつ自然がつくったままにしておかない。人間そのものさえそうだ。人間も乗馬のように調教しなければならない。庭木みたいに、好きなようにねじまげなければならない」。

1789年フランス人権宣言：「人の神聖不可譲な自然の権利を…提示することを決意」。

「すべての政治的結合の目的は、人の時効によって消滅することがない自然の権利の保全にある」。

エンゲルス<sup>2)</sup>「われわれは、一歩すすむたびごとに次のことを思いしらされるのである。すなわち、われわれが自然を支配するのは、ある征服者がよそのある民族を支配するとか、なにか自然の外にあって自然を支配するといったぐあいに支配するのではなく、— そうではなくてわれわれは肉と血と脳髓ごとごとく自然のものであり、自然のただなかにあるのだということ、そして自然にたいするわれわれの支配はすべて、他のあらゆる被造物にもましてわれわれが自然の法則を認識し、それらの法則を正しく適用しようという点にあるのだ、ということである。…そして実際にわれわれは日ごとに自然の法則をいっそう正しく理解し、自然の昔ながらの歩みにわれわれが干渉することから起こる近い将来また遠い将来の結果を認識してゆくことを学びつつある。ことに今世紀にはいって自然科学が長足の進歩をとげてからというもの、われわれはしだいに、すくなくともわれわれの最も日常的な生産活動については、そこから当然生じてくるはずの遠い将来の自然的結果をも

知ってこれを支配しうる立場になってきている。しかしそうなればなるほど、人間はますますまたもや自分が自然と一体であるということを感じるばかりか知るようになるであろうし、また古典古代の没落以来ヨーロッパで抬頭して、キリスト教においてその最高度の完成を見た、あの精神と物質、人間と自然、魂と肉体との対立という不合理で反自然的な観念は、ますます不可能になってゆくであろう」。

近代科学・近代文明＝人間と自然の二分法に対する批判的視点を内包。

BUT 現在、近代科学・近代文明＝自然を一方的に支配・征服する「人間中心主義」であるように見える。

WHY？

## 【2. 目的論・意味論の看過】

進化論・地動説の意義＝「自然の一部としての人間」という側面だけで評価。

人間にとっての「意味」が軽視。

「科学＝人間の主体論・目的論を排した客観的認識」という誤った認識の普及。

→人文科学・自然科学の分離、諸科学の細分化。

ガリレオ、ニュートン・ダーウィン：哲学者。

「科学者 (scientist)」＝19世紀半ばの造語。

地動説・万有引力・進化論の法則＝人間存在の根本を指し示すコスモロジー・世界観の大転換

→天文学・生物学・物理学など、細分化された自然諸科学の客観的法則へと矮小化。

＝目的・主体論排除こそ科学的？。人間＝自然の一部（主体性の看過）。

近代科学の知見・成果を人間中心主義の観点から受けとめてこなかったこと

→近代科学は「自然を征服する人間中心主義」と批判される原因。

初期の「科学者」達＝「神の目的」を立証。（「科学」＝「宗教」とは異なる独自の目的論をもたず）。

18世紀～、宇宙・世界＝{神の目的}に沿う創造物ではなく、ただの自然過程として生成。

19世紀～、進化論＝人間も自然の進化過程の一産物。宇宙・世界＝自然の生成・進化過程。目的論の喪失。

BUT 進歩（進化）の必然性。産業革命以後の資本主義形成に適合的な価値観。

人間の目的論・主体論＝無視。

人間を中心に据えた目的論＝科学からつねに排除。科学的真理＝目的論・主体論をもたない(?)。

ロック<sup>3)</sup>：啓蒙主義以前：自然＝生命をもった道徳的・精神的な力。

BUT 近代：自然＝科学的実験の対象、身体＝物質、「生命のない白紙のページ／死んだものとしての自然」。

自然一般＝目的をもたない。

生命の発生＝「生きること（生命－生活）」という目的の誕生。

「生物の進化は目的的不是」：

①進化＝一定の形質的な目標・ゴールを目指した一筋道の変化のプロセスではない。

BUT 変異の形質それ自体は目的的不是ではないが、その基底にあり、変異を生み出す生命活動それ自体は目的的。

②生物にとっての目的＝意識されて初めて目的になりうる。目的の成立＝脳の発達が不可欠。

進化＝目的として脳に意識されない。

BUT 「生存・生きること」＝脳により、明確に目的として意識。

脳の発達→目的＝手段と対概念化。多元的・重層的に発展。

目的＝自然によって与えられるもの、自然の中に客観的に発見できるものではない。

人間自身の「生存・生きること」を出発点とし、人間の脳によって自覚された主体的・主観的意識。

人間の主体的・主観的な目的の一つ＝自然の客観的な認識－科学の発展。

∴ 自然そのものには目的がない。

∴ 人間＝「生存・生きること」という本質的目的を出発点・起動力として、自然を主体的に改変・改造・制御していかなければならない。

→自然法則の客観的認識、目的論を排した因果関係の客観的認識が不可欠。

科学＝人間の本質的目的に基づく主体的な意識・行為。

科学における目的論の排除＝人間による目的意識的・主体的な選択。

佐藤文隆<sup>4)</sup>「宇宙論がいくら人間の位置を相対化しようと、それは人間の宇宙論なのである。われわれは、放り出された時間、空間の広さとなんのいわれもない出生に孤独を感じるよりは、開拓地を築きあげてきた人類というコミュニティの連帯を感じるべきであろう。そこに宇宙論の今日的意味があるのだといえるかも知れない」。

ブクチン<sup>5)</sup>「自然は、秩序があり、この秩序は、人間が理性的に自然を解釈するとの仮説が、科学によって立てられ、それは大成功を収めた。しかし、その理性は、観察者である人間のもっぱら主観的な属性であり、観察される現象の属性ではなかった。つまるところ、科学は、アミニズムや形而上学の廃墟の上に立てられた寺院となった。が、それらなしでは科学は自らの矛盾に満ちた沼地に沈んでいくであろう」。

→科学のある種の限界。

人間＝目的（“WHY？”への解答）を求める。BUT 自然そのものに目的はない。

& 科学＝目的論を目的意識的に排除。→方法（“HOW？”への解答）の域を出ない。

ベルナール<sup>6)</sup>「我々の感情はつねに『何故に』という質問を提出するが、我々の理性は『いかにして』という質問のみが我々の達し得る範囲にあるということを示している」。「本当に神秘的なのは物事がいかに世界に存在するかではなく、それが存在すること」。

& 科学＝無限の自然の前で、有限の人知によって日々更新される、暫定的・限定的な解答。

∴ 人間による「“WHY？”の追求」＝人類が存続している限り、無限に続く。

脳・意識の発達によって目的意識的に環境に適応を果たす、特殊な進化をたどってきた人類の宿命。

BUT 人間＝しばしば目的を見失い、「“WHY？”の追求」を放棄。

∴ 目的と手段の多元化・重層化→目的それ自体が相対化、部分化・断片化。

「生存」という本質的目的を見失い、それ以外の部分的・断片的な手段——利潤増殖、競争での勝利、地位獲得、ある限定的な範囲の知の習得等——があたかも本質的目的であるかのような錯覚。

→「WHY？」ではなく、「HOW？」への解答で満足してしまいがち。

& 科学の物神化→目的論・主体論を排除した客観だけで世界が認識可能（OR それこそが正しい）とする錯覚。

科学＝脱魔術化 & 再魔術化。

目的論を排除した客観的認識＝物理学・化学・地球科学等では比較的、首尾一貫させやすい。

BUT 人文・社会科学、生物学＝目的を排除できず。

モノー<sup>7)</sup>「科学的方法は、〈自然〉は客観性をもっているという当然の仮定の上に置かれている。つまり、ある現象を最終原因すなわち《目的》の面から解釈することで《真実》の認識に到達できるという考えを、否定しようという体系なのである。…しかしながら、われわれはまさに客観性の示すところによって、生物のもつ合目的的性格を認めざるをえないのであり、生物がそれぞれの構造と性能とをつうじてなんらかの目的を実現し、かつ追求しているのを認めざるを得ない。したがってそこには、すくなくとも外見上、深刻な認識論上の矛盾がある。生物学の中心の問題はまさしくこの矛盾そのものなのである」。

BUT 科学の物神化、目的論の排除＝生物学、人文・社会諸科学でも進む。

自然科学と人文・社会科学の分離、学問分野の細分化と表裏一体。

細分化された学問分野の中での「目的論の排除＝科学的方法の確立」への指向。

19世紀、経済学・政治学・社会学等への細分化。

部分化・断片化された「目的」の自明視→人文・社会科学＝2つの方向で「発展＝墮落」。

a) 自然科学との方法的な違いを強調→人文・社会科学の独自の存在意義と既得権を安泰に。

b) 人間の「生存・生きること」という本質的目的から目をそらし、個別のささいな出来事の因果関係の客観的認識に視野を限定→自然科学と同様、「科学」の名に値する地位に自らを引き上げる。

→細分化されて目的を失った諸科学＝人間の本質的目的にとって無意味な、部分化・断片化された「目的」の一つと化す。現実に対する諸科学の無力化。  
重要な課題＝近代諸科学における目的論の排除が、人類による極めて目的意識的な、そして意義深い主体的選択であったことを明確に自覚。  
& 科学の目的＝人類の本質的目的。細分化された近代諸科学それ自体の克服。

### 【3. まとめ】

《克服すべき「常識」》

近代は、物質主義、産業・経済優先、科学万能、西欧文明至上主義、人間中心主義、一元的な同化の強制、「人間による自然の征服」の時代であり、これが今日の危機的な環境破壊の元凶だ。だから精神・生活・自然を重視し、東洋思想、生命圏平等主義、多元主義等の見方が、現在の危機を克服するオルタナティブになる。

**NO!** 近代科学（地動説・万有引力・進化論）＝「自然の一部としての人間」の把握。

それに基づく唯物論的ヒューマニズムの創成。（ルソー「自然に還れ」、自然法）

BUT 近代科学＝（人間にとっての）目的論・意味論の喪失。

「科学＝人間の主体論・目的論と無関係な客観的認識」とする誤謬の蔓延。

& 科学の物神化→目的論・意味論を排除した客観だけで世界は認識可能（or それこそが唯一の正しい認識）とする錯覚。

科学＝脱魔術化 & 再魔術化。

＝人間中心主義の喪失。

人文科学・社会科学・自然科学の分離、諸科学の細分化と表裏一体。

引用・参照文献

- 1) ルソー, J. J. (1962) 『エミール』上 (今野一雄訳) 岩波文庫 23頁。
- 2) エンゲルス, F. (1968) 「自然の弁証法」『マルクス・エンゲルス全集』20巻、大月書店 491～492頁。
- 3) ロック, M. (1998) 「『自然な身体』という神話」(薄井明訳) 『現代思想』vol. 26-11。
- 4) 佐藤文隆 (2000) 『科学と幸福』岩波現代新書 202～203頁。
- 5) ブクチン, M. (1995) 「ソーシャル・エコロジーとは何か」(戸田清訳) 小原秀雄監修『環境思想と社会』東海大学出版会 220頁より。
- 6) ベルナル, C. (1970) 『実験医学序説』(三浦岱栄訳) 岩波文庫 139頁。
- 7) モノー, J. (1972) 『偶然と必然』(渡辺格・村上光彦訳) みすず書房 23～24頁。